

## 主張

今年度、特別支援学級の情緒学級の児童6名を担当している。タブレット端末を使用した学習に興味を示す一方で、ゲームサイトを開こうとするなど、不適切な利用が見られた。これは、時間を忘れて過集中してしまうことや、自らの行動を抑制することに困難を抱えている児童の特性に対し、教師が適切な支援を行えていないことが原因であると考えられる。そこで、本実践では、児童が使用する時間を守り、良い姿勢・態度で、学びにつながる内容に取り組む姿を、タブレット端末を「上手に」使用する姿と捉え、その姿を目指して支援を行った。自己管理スキル支援システムを用いた支援を一定期間続け、学級全体で目標に向かって取り組むことで、児童が端末の使い方を更新していく姿が見られた。

### 1. 設定の背景

自閉症・情緒障がい特別支援学級での児童の様子を見てみると、タブレット端末に対して強いこだわりがあり、タブレット端末で遊びたい、ゲームをしたい、動画を見たい、という様子が見られた。また、時間を守らずにずっと続けようとする姿も見られた。思い通りにできないと、泣いて怒ったり、タブレット端末を叩いたり物を投げたりすることがあった。特に児童Aはその傾向が強く、学習に使用することが難しい状況にあった。そうした不適切な使用をする児童に対して、厳しく叱ったり、一時的にタブレット端末を預かったり、学級全体で使用する機会を減らしたりする対応をしてきた。

しかし、この対応では自らの行動を抑制することに困難を抱えている児童の特性に適切な支援が行えていたとは言えず、また、学習指導要領の示す情報活用能力の育成にはつながらない。そこで、禁止ではなく自分でコントロールできるようにしたいと考えた。デジタル・シティズンシップ教育では、日常的な使用を前提とした、前向きな対処法を考えることが大切であるとされている。教師による「禁止」ではなく、児童自身が自分でタブレット端末を「上手に」使えるように、支援する方法を検討した。

### 2. 目指す児童の姿

#### 児童が「上手に」タブレット端末を使用する姿

「上手に」端末を使用する姿とは、「使用する時間を守ること」「姿勢・態度良く使用すること」「学びを深める内容に取り組むこと」と捉えた。

「学校でのICT活用の現状と近視予防」(柴田, 2019)の中で、近視の児童が増えていることについて、デジタル機器の使用時間が伸びていることに触れ、姿勢が崩れ、近距離で使用することが影響を与えている可能性を示唆している。そこで、「時間」と「姿勢」を項目に入れた。また、新潟市GIGA宣言で「学びを深める」ために端末を使用することを確認しているため、「内容」を項目に入れた。児童は自らの使い方に問題意識をもっていたため、「態度」を姿勢と共に項目にした。児童の実態から、端末の操作方法やタイピングの速さといったスキルよりも、日常的に使用するうえで大切な態度を身に付けさせたいと考え、目指す児童の姿を設定した。

### 3. 手立て：自己管理スキル支援システム

自分で「上手に」使用できるようにするために、自己管理スキルの向上に着目した。自己管理スキルとは、自ら行う制御行動(竹内・園山, 2007)のことである。このスキルを高めるために、竹内・園山は自己管理スキル支援システムを図1のようにまとめ、提唱した。

標的行動とは、端的に表すと「めあて」である。まず、標的行動が達成されるように具体的に定義したり、目標やルールを定めたりする。次に、自己記録や自己評価の仕方を定める。そして、図の「S<sup>o</sup>の整備」と書かれた、弁別刺激の整理を行う。これはいわゆる手立てである。強化子は、ご褒美と似た意味を持つ。先行研究では、「テレビを観ること」が挙げられている。

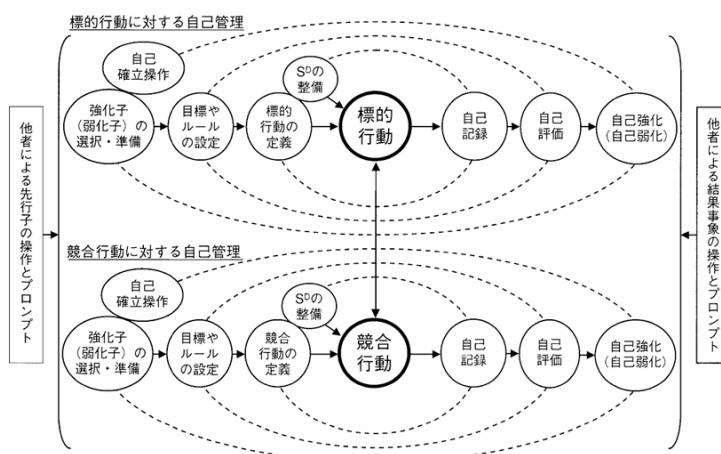


図1 竹内・園山が提唱する自己管理スキル支援システム

このシステムに当てはめて、実践を2回行った。なお、本実践では、「競合行動に対する自己管理」を考慮しなかった。競合行動とは、「定義された標的行動とは同時に遂行することができない(または同時に遂行するのが難しい)行動のこと」である。竹内・園山は、「競合行動の影響を強く受けている場合、競合行動への介入が効果的である。」と述べている。今回の実践においては、競合行動を定義することが難しいため、考慮しなかった。

#### 4. 実践1の概要

令和7年6月～7月にかけて4週間実施した。始めに、全員に今のタブレット端末の使い方が「上手」かを問い、問題意識を共有した。そこで出た意見をもとに、具体的な目標・ルールの設定を行った。「時間」を守る、「姿勢」良く活用する、学びにつながる「内容」に取り組む、の3点となった。自己評価をする際に目標を明確にするため、「態度」は含めなかった。

次に、自己記録・評価として、1週間を振り返り、3つの項目に対して4件法で自己評価し、ワークシートに記録することを確認した。評価後、翌週特に頑張りたいことを記述することとした。こうした活動を自立活動の中で行った。

##### ・全体の傾向

継続して実践を行うことで、学級全体では1週目の3項目の合計平均が7.5点であったのに対し、4週目は10.5点まで上昇した。特に、「時間」については2.5点から4点まで上昇した。

##### ・児童Aの様子

実践前に児童Aは、授業中・休み時間にかかわらず、タブレット端末で本来閲覧できないはずのサイトを開いてゲームをしようとしたり、動画視聴サイトで動画を見ようとしたりしていた。注意してもやめる気配はなく、強い口調で注意すると怒ってタブレット端末を叩いたり、甲高い声で叫んだりしていた。児童Aの自己評価は、次のように変化した。

表1 実践1の児童Aの自己評価

質問	6月23日	6月30日	7月7日	7月14日
「時間」に気を付けたか。	1点	3点	4点	4点
「姿勢」に気を付けたか。	2点	2点	3点	4点
「内容」は学びを深めるものだったか。	3点	4点	4点	3点

評価後の目標設定は、1週目は「時間」の項目が低かったため、「時間に気を付けて正しく使う。」とするなど、自分の行動を振り返って考えていた。実際の姿も、「時間」に関して、「やめよう。」と担任

が声を掛けると、やめる姿が見られるようになり、7月には声を掛けられる前から意識してやめようとする姿が見られた。「姿勢」は、机の下でこっそり操作する姿が見られなくなった。「内容」に関して、周囲の声掛けもあり、動画を見ようとするものの、実際にサイトは開けなかった。4週目にイライラしていた時にゲームをしようと1度だけサイトを開くことがあり、それを客観的に振り返って自ら3点にしていた。

一方で、3週目頃から、「先週より良い点数にすればいいだろう。」という気持ちで点数を付けようとする姿も見られた。これは、他の児童に関しても同様のことが言える。その原因は、竹内・園山は、自己選択を大切にしているにもかかわらず、目標やルールを教師が設定し、また、目標が明確でなく児童にとって評価しづらかったことと、強化子が適切でなかったためと考えられる。さらに、竹内・園山は「他者の影響」の大きさについても指摘している。実際に本実践でも、担任や児童からの声掛けで気持ちを切り替え、標的行動に向けて取り組む姿が見られた。そこで、実践2では、「④と⑥を自己選択すること」と、より学級全体で「頑張ろう。」という気持ちになるように活動を工夫した。

## 5. 実践2の概要

令和7年の9月～10月にかけて実践を行った。夏休み前の実践を振り返り、夏休み後、「上手に」使えているかを問うた。児童は、「できていない。」と考えていたため、もっと上手に使えるようになるために、実践2を行うことを確認した。そしてどんなことを頑張りたいか聞くと、その結果は、右のようであった。態度面に触れる児童がいたため、実践1の「姿勢」に「態度」を追加して目標を考えることにした。

そのためには、どうしたらよいか。

- ・じかん をまもる
- ・しせい をよくなる
- ・ないようをかんがえる
- ・たたかない、やつあたりしない
- ・せきを立たない
- ・ちがうことをしない(かくしゅうにつかう)

児童自ら目標を立てた。教師は個別に声掛けをし、自分に合った目標を立てられるように支援した。その結果、表2のようになった。

児童Aは「タブレットに八つ当たりをしない」という目標にした。こだわりから、時間になっても使用をやめられない2年男児(児童B)は、「時間を守る」という目標にするなど、自分の行動を振り返り、目標を立てる姿が見られた。なお、このとき「内容」を選択する児童がいなかった。

児童	3項目	自ら立てた目標
児童A	姿勢・態度	タブレットに八つ当たりしない(叩かない)
児童B	時間	やめる時間を守る。
児童C	姿勢・態度	使っているときに席を立たない。
児童D	時間	準備や片付けを素早くする。
児童E	姿勢・態度	姿勢良く使う。
児童F	時間	やめる時間を守る。

表2 実践2でのそれぞれの目標

目標を立てた後で、具体的にどのように取り組むかを相談し、合意形成していった。特別支援学級で端末を使用した際に自分の行動がどうであったかを振り返って評価することを確認した。そして、自分の目標が達成できたら毎日掲示しているシートにシールを貼ることにした。

強化子として、自分が2週間目標を達成できたら学校でできる範囲で好きなことを決めて取り組むようにした。すると、「バドミントンをする」「バスケの練習をする」「変顔大会をする」などと自己決定していた。さらに、学級全員が2週間達成できたら、お楽しみ会をすることを提案した。児童は「それはやりたい。」と意欲が高まっていた。

その後、目標と強化子を一覧にして掲示した。目標を達成できたらシールを貼るシートも作成し、合わせて掲示した。

実践中、児童Aはタブレット端末の操作がうまくいかず、机を叩く場面があった。その際、児童Cが励ましの声を掛けるなど、目標に向かい、互いに声を掛け合う姿が見られた。また、児童Bはシールを

早く貼ってほしいと頼むなど、楽しみながら取り組む姿や、児童Dはシールを貼る活動自体に興味を示し、他の学習でもシールを貼ることで興味をもって学習に取り組んでいた。

実践後の振り返りや、児童の姿は次のようなものが見られた。

#### ・全体の傾向

自己評価を1日1回行ったことと、掲示物があったことで、より意欲的に取り組む姿が見られた。1名が1度だけ目標を達成できなかったが、欠席を除き、他の児童は2週間毎日目標を達成し、シールを貼ることができた。楽しみながら取り組む姿が見られた。

#### ・児童Aの様子

振り返りには、「ミッションをふやしてそれががんばる」と記述していた。「ミッションって何のこと？」と担任が聞くと、「いろいろ！」と言い、姿勢やキーボードを叩かないことを指していた。後で「タブレットに悪口を言わない」と追加で記述していた。

#### ・他の児童の様子

児童B、児童C、児童Fは実践後の振り返りに「実践後も続けられている」と記述し、1度身についた行動が継続していると振り返った。一方で、児童Eは実践前と姿が変わらず、児童Dは実践での変化を自覚していない様子が見られた。

## 6. 成果と課題

### 成果

- ・自ら目標を立て、自己評価を行う活動を一定期間続けることで、自己管理スキルが高まる。
- ・自己管理スキルが高まり、タブレット端末を学習用具として用いることができるようになった。
- ・目標に向かって学級全体で取り組むことで、励まし合うなど支持的風土の醸成にもつながった。

### 課題

- ・実践2では、「内容」に関することを目標にする児童がいなかった。情報活用能力の育成につながらなかった。学級の畑での活動を紹介する際にタブレット端末を用いるなどして、力を高めたい。
- ・実践1で最初から評価の高かった児童Eは、実践2の後も変容が見られなかった。児童Dは活動を振り返った際に、目標とは関係のないことを記述していた。この2名にとっては、「上手に」の設定の仕方が実態に合っていない可能性がある。一人一人に適した目標を支援者と一緒に考えることで、自己管理スキルを向上させる必要がある。

## 7. 参考文献

- 1)平成29年度告示 学習指導要領解説 総則編 第3章2の2の(1)
- 2)坂本旬・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・林一真.(2020). デジタル・シティズンシップ コンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学び. 大月書店. p153
- 3)堀田和秀・津田泰至.(2022). 「禁止・制限」より「安全な使い方」を教える! GIGA スクール時代の「ネットリテラシー」授業プラン ワークシート付き. 学芸みらい社
- 4)柴田 隆史.(2019). 学校での ICT 活用の現状と近視予防. 視覚の科学 40 (4). 79-84
- 5)竹内 康二・園山繁樹.(2007). 発達障害児者における自己管理スキル支援システムの構築に関する理論的検討. 行動分析学研究 20 (2), 88-100